

スクールセクハラ

“セクハラ問題をきっかけに、
人間にとっての性とは何か” 考えてみよう
～幸せな性関係をつくるって 結構むずかしいテーマだ～

一橋大学 講師 村瀬 幸浩

村瀬幸浩：一九四一年生まれ。東京教育大学卒業後、私立和光高等学校の保健科教諭として25年間勤務。一九八二年に性教育に取り組む教師・研究者・市民の代表として「人間と性 教育研究協議会」を設立。従来の性教育にジェンダーの視点から問題提起を行ってきた先駆者であり、性教育の第一人者である。スクールセクハラについても、早くから講演や著作の中で問題提起してきた。一橋大学講師・津田塾大学講師として現在も現場で講義を続けている。季刊「sexuality」編集長。「人間と性」教育研究協議会代表幹事

若い人たちの性行動が活性化しているといわれる。よくひきあいに出される高校生の性交体験率をみると、三年生で40%近くあるというデータもある。それを多いとみるか少ないとみるかひとさままだが、年を追うごとに多くなってきていることはたしかだし、とりわけ女性の变化が著しい、ということも特徴の一つである。

なぜか、その分析をあれこれこずするのはやめておくが、この活性化をむしろ当然のこと、としてまず受けとめたい。国際テロとこれに対する武力攻撃、今後どのようにわが

妊娠と中絶の背後にある問題

望まない妊娠、その結果としての中絶の、とくに十代女性における確実な増加―もちろん中絶はあくまで

国の青年の人生にこの影響がふりかかってくるのか十分に予測できないが、明日の生命が危機にさらされるということはずまずないであろう。この意味における平和、そして豊かさ、あふれる性情報、ジェンダー偏見による女性の性の抑圧からのとりあえずの解放、不確実な性倫理社会のもので何でもありの状況が生まれているからである。

ならば、若い人たちの「性」は幸せなのか、と考えるみると、なかなかそうとは言い切れないのが現状である。

合法的であり、中絶できることは良いことである。しかしともに避妊にとりくむ力も考えもなく、その結

果の選択としての中絶はやはり悲しいことであり、何かしななければならないことである。それから性感染症の問題も決して軽視してはならない。国連が臨時の総会を開き「人類の危機」と評してとりくみの強化を確認しあつたHIV感染・エイズ、この問題に対し、一体どれだけの人

びと、とくに性行動の活ばつな青年たちがどれだけの切実性をもっているだろうか。コンドームは望まない妊娠予防に欠かせぬものとの意識はあつても（実際には確実に使われてはいないが）性感染予防、さらにエイズに関していえばライフ・ガード（救命具）として考える意識など皆無に近いのではないだろうか。そのためクラミジア感染症がとくに若い人びとの間に蔓延してきているのである。クラミジアは治療をはじめれば一週間ほどで完治するといわれている。しかしこの蔓延はその背後にHIV・エイズのひろがり予想されるのであるが、その発症発病は10年ほど後にしか、あらわれないことをどう考えたらよいであろうか。

さて、セクシユアルハラコメント、いよいよわが国でも会社、企業にお

いてはもとより学びの場、学校、大学に於いてもとりくむべき人権の課題として提起されるようになってきた。

実はこの言葉、わが国では一九八九年に「日本新語・流行語大賞」の新語部門で全員に選ばれたのだが、いま思えば10年以上も前のことである。当初は冗談やからかいの類いで表現される傾向があったが、いまやとその防止のため本格的なとりくみがはじまりかけたといえるだろう。

いうまでもなくセクハラは昔からあった、あり続けた。しかしそれは問題にならなかつたというより問題にしにくかつたし、もっと言えば「問題」として意識されることがなかつたといつてよいだろう。なぜなら身分上、立場上の上下関係のもとでは「上」の者の恣の行為を「下」の者

大学でのセクハラの問題点

そうした観点から大学という教学の場をあらためて見つめなおしてみると、

イ、構成員の量からして圧倒的に男性優位の場である。とくに指導的立場に立つのはほとんど

は我慢して受け入れるのが当たり前とされてきたからである。男性の集団というか、男同士の関係の中にはいまもそうした傾向はつよい。そしてしばらく前までは会社、企業も大勢もほとんど男性によって占められていたのである。そうした場に60年代後半から70年代、そしてそれ以後、続々と女性が進出してきた。そのことによってこれまで男性同士の閉じた関係の中で顕在化しなかつたことが新たな問題性をもつて浮かびあがってきたのである。それが目下の女性を性的に利用し支配しようとするセクシユアルハラスメントである。そしてまさにこの新しい言葉によつてそれまでハッキリと目に見えなかつた「問題」に光があてられたといつてよいだろう。

男性であることが多い。

ロ、学問的権威と人格の価値の高さが混同されやすい。

ハ、師弟という関係を上下関係、支配、被支配関係、つまり権力関係であるように思いこみやす

い。しかもこの関係は長期にわたる可能性がある。

二、これらに加えて成績評価や単位認定権など「代償」として提供できるものを持つていることが一層権力関係を強化する可能性がある。

こうした問題に個人的に対応することはきわめて困難であり、したがつて組織的対応の手だてが講じられるようになったことは喜ばしいことである。あわせて教職員の研修を通じて「問題」の本質をすべて構成員が把握すること及びセクシユアルセクスを磨くことが不可欠といえよう。

もう一つ大きなキャンパスセクハラの問題として指摘しておかねばならないことに先輩と後輩、上級生と下級生の間で起きるケースがある。もっともこれは立場上の優位性を利用して性的支配をはたそうというセクハラの域をこえてレイプというべきかもしれない。

その境界を云々するのは本位ではないのでここではこれ以上触れなないがただ一つレイプという見知らぬ人間関係のもとで起きるものという誤解があるとすればそれは解いてお

きたい。「デートレイプ」との謂があるように知り合い、友人、恋人の関係においてはレイプはあるし、それはむしろ見知らぬ間柄よりも多いといわれていることを認識しておいてもらいたい。

望まない性交の強要をレイプとする、そんなことは自分たちとは無関係だと思つ人が少なくない。しかし、性行為が行われている間、性行為の終わつたあとお互いの間に、微笑みと感謝、の気持ちにみたまれない性行為は基本的にレイプというべきではないかと私が語ると一挙に自分たちの性のあり方の点検に学生の心は向かうようである。

レイプとマイクラブ、それを分けるのは「微笑みと感謝」ではないかという見方を提起しておきたい。そして相手の人のふるまい、眼差し、しぐさ、言葉づかいなどから相手の人の心情を受けとめ判断する感受性感性、それをセクシユアルセンスといたうがそういったものを磨くのが幸せな性関係をつくる上で欠かせないことだ、このことをあらためて伝えおきたいと思う。

こうした立場に立つて考えると避

妊に気遣わないセックスはいわば「虐待」といふべきではないだろうか。HIV、エイズやその他のSTD（性感染症）に無頓着な性行為もまた然りである。

性はその人の一生にとって重大なテーマである。新しい生命を生み出すことにつながったり、それを意識的に避けながらふれあう喜びや安心感、快感を分かち合って生きる充実を味わう意味がある。それは多くは異性との間で行われることが多いが、同性間でそれをみだしあう人もいる。

そしていまいくつかの図では同性の婚姻を合法とするようになっていく。また男女の中間の性を生きる人や性別適合手術によって本来の性器で生きたい人もいることがはっきりしてきた。性同一性障害の人たちである。また性器にはとくにこだわらないが社会的に本来の性別で生きたい人もいることがはっきりしてきた。また性同一性障害の人たちである。また性器にはとくにこだわらないが社会的に本来の性別で生きたい人もいるのである。こうしたトランスジェンダーの人たちの存在によって明らかになってきたのは性のグラデーション（徐々なる変化）ということである。このように性別や性的指向など多様性をもっていること、しかもそれぞれ性の性を十全に生きる権利を人々が持っているひと、それはまさしくその人権であり侵害したり、されることなどあつてはならないのである。

以上のようなことを認識した上で幸せな性関係をつくって生きていくこと、これはなまやさしいことではないが、しかしそれだけにとりくみ甲斐のあるテーマである。

性を下半身の、わいせつの、いわゆる「いやらしい」問題などという観念からいち早く抜け出して生きる上の重要テーマの一つとして真正面に見据えてとりくんで欲しい、とつくづく思っている。

以下、こうした問題を考えるための拙著のいくつかを紹介したい。参考にしていただければ有り難い。



「スクールセクハラ」のちらし



- 『ニューセクソロジーノート』 共著
- 『ビルと避妊と性の教育』 共著
- 『買春と売春と性の教育』 共著
- 『思春期ガイド』 共著
- 『日本の男はどこから来てどこへ行くのか』 共著
- 『性教育が深まる本』 共著

いづれも 十月舎刊(☎03-5805-2530) また最近、日本経済新聞社から『スクールセクハラ』について研修するためのビデオを制作した(小学校編、中高編の二本)ので紹介させていただく。